

耳納風土記 27

わかばかい
安元知之と嫩葉会

問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎ 75-3343

発掘で姿を現した円形劇場



道の駅うきはの北西方向、斜面を1段下った先、筑紫平野を一望できる場所に円形劇場と呼ばれる施設があります。これは、大正14

(1925)年に造られたものです。斜面を観客席とし、底地を舞台として設計されたこの劇場は、ギリシヤ式劇場を模したとも言われており、当時の日本には例のないものでした。今回の耳納風土記では、この劇場を造った「嫩葉会」という農民劇団と、その指導者であった安元知之について紹介したいと思います。



安元知之

安元知之は山春村の医師の家に生まれ、名家の長男として育てられました。19歳の頃に心臓病を患い、それ

まで熱心に行っていたスポーツができなくなってしまいますが、芸術にも造詣が深く、学生時代に画家を志したこともあった万能の天才といえます。そんな知之が設立に関わった「嫩葉会」という農民劇団ですが、嫩葉会設立の意義と活動について理解するには当時の社会状況も知っておく必要があります。

大正時代は都市部と農村部の格差が広

がった時代で、同じ浮羽郡内でも蒸気機関車が走る吉井町と比べ、山春村は貧農が多く、娯楽と言えは酒や賭け事、女遊びでした。この乱れを危惧した村の若者が相談したのが、村医者だった安元知之だったのです。かくして若者達は大正12(1923)年に「嫩葉会」を結成し、知之の指導の下、西洋の演劇を取り入れた「新劇」という先端の芸術に取り組み、日田や久留米で講演を行うまでに成長していきます。彼らが試演と呼んだ講演会は19回を数え、50作近くの演目を演じました。その活動は著名な劇団関係者にも知られ、翻訳家でもあった三浦関造は山春村を訪れ、会員達と交流しました。また、嫩葉会の活動は演劇のみならず、青年男女運動会など、今で言う村おこしの活動も積極的に企画・運営しました。

しかし、決して本業の農業をおろそかにすることはなく、あくまでも農民劇団だったのです。そんな彼らが望んだのが、山春村民が一堂に集まれる場所を造ることでした。彼らの高い志に賛同した村長をはじめ、村の有志が土地・経費を負担し、延べ331名で造りあげたのが円形劇場でした。当時は野天公会堂と呼ばれ、招魂祭後、開堂式を行い、舞台では青年相撲が行われました。しかし悲しいことに、竣工翌年の大正15(1926)年3月、知之の病状が悪化し、円形劇場が嫩葉会によって使われることはなく、翌昭和2

(1927)年1月19日、知之は36歳の若

さでこの世を去ります。嫩葉会にとってはパトロンであり、演劇の指導者であり、また、精神的な支柱となっていました。知之亡き後、嫩葉会を存続する声もありましたが、実質的な演劇活動が伴わないのであれば、知之に対して申し訳がない、との思いから昭和3(1928)年1月7日の追善試演を以て嫩葉会は解散しました。

円形劇場は月日と共に土に埋もれてしまいました。道の駅整備の一環として円形劇場を整備することになり、平成27年に発掘調査が実施されました。発掘成果を元に、保存と活用のための復元整備を行い、現在では演劇やお祭りなど、様々なイベントに活用いただいています。11月23日には、結成100周年記念イベントを円形劇場に行います。約100年の時を超えて、円形劇場にはようやく役者の声が響き渡り、知之や嫩葉会が望んだであろう人々の笑顔があります。私たちが土の中から発掘したのは、安元知之や嫩葉会の若者達の想いだったのかもしれない。

最後に、嫩葉会会員が三浦関造に言った言葉を紹介します。「自分達は、土と芸術を愛し、美の靈魂を持つて労働を楽しみ、断じて都会に憧れない」。なんと誇りに満ちた言葉でしょうか。当時、文化とは切り離された場所でありながら、労働と文化、両方の面で満たされたこの若者達の姿は、現代の私たちも見習うべき事が多いように思います。